OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本中国学会　第四十五回大会要項
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 1994, 15, p. 107-140
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61031
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

期日　平成五年（一九九三年）九月二十五日（土）・二十六日（日）
会場　吹田（すいた）市文化会館（通称　メイシアター）

日本中国学会

第四十五回大会要項

日本中国学会

目次

御挨拶……1
日程等事務連絡……2
プログラム（末尾に「適塾・懐徳堂」案内）……4
研究発表（哲学・思想）要旨……8
研究発表（文学・語学）要旨……17
講演要旨……26
大会会場への交通案内地図……27
懇親会会場への地図……27
最寄り駅から大会会場への詳図……28
適塾への地図……28
大会会場内の平面図……29
大会会場・準備会の地図・電話番号……裏表紙

今大会の主眼

（一）研究発表は、大学院生の比率の適正化を図り、中堅以上の研究者を主体とする。

（二）会員外の島田虔次・陳舜臣・佐藤慎一各氏を招聘してシンポジウム「儒教と二十一世紀と」を開催。

（三）田仲一成会員（本年度日本学士院賞・恩賜賞の受賞者）の講演。

（四）学術参考ビデオ（『儀礼』士昏礼の復元等）の放映。

（五）大阪大学所管の史跡・重要文化財「適塾」の参観招待。

拝啓。時下御清栄の段お喜び申しあげます。

さて、日本中国学会第四十五回大会は、きたる九月二十五日（土）・二十六日（日）の両日にわたり、吹田市文化会館において開催いたします。何とぞ万障御繰合わせの上、御参加下さいますよう御案内申しあげます。

なお、御出席の方だけ、同封の葉書に所要事項御記入の上、八月二十日必着にて御返送下さい。受取人払の葉書ですので、欠席の方は、絶対に投函なさらないでください。

御文安をお祈り申しあげます。

敬具。

平成五年七月二十日

日本中国学会理事長　伊藤漱平

第四十五回大会準備会代表　加地伸行

会員各位

日	時	行　事	場　所 (吹田市文化会館)
24日(金)	15:00	理事会	三階第一会議室
25日(土)	9:30	受付(携帯品預り)	二階中ホール入口
	10:00	開会式	二階中ホール
	10:15	研究発表 哲学・思想部会 文学・語学部会	 一階集会室 二階中ホール
	11:45	記念撮影	二階中ホールの中央前方座席に着席して下さい。
	12:00	評議員会	三階第一会議室
	13:30	研究発表	午前中に同じ
	14:30	シンポジウム (17:30終了予定)	二階中ホール
	18:30	懇親会	ルシェル（27ページ地図参照）
26日(日)	9:30	受付	前日に同じ
	9:40	研究発表	前日に同じ
	10:50	講演 (11:50終了予定)	二階中ホール
	11:50	学術専門委員会	三階第一会議室
	13:00	総会	二階中ホール
	14:00	閉会式	同上
	14:20	ビデオ放映	同上

①学会費　　5,000円（本年度未納の方を対象）
②大会参加費　2,000円　③写真代　　1,000円(含送料)
④昼食弁当代　1,000円　⑤懇親会費　5,000円
（懇親会だけの参加は不可）

[学会本部]三階第一会議室
[理事長控室・応接室]三階第二会議室

[準備会本部]中ホール内の母子室
[準備会事務局]レセプションホール控室
　御用件は受付に

[シンポジウムパネラー・講演講師控室]三階第二会議室

交通関係 大会当日の朝、ＪＲ吹田駅下車の方は、阪急タクシー(貸切なので料金不要。乗場は28ページに地図)を御利用下さい。ただし、二日間とも午前九時から十一時まで。なお、大会会場には駐車場はありません。

呼び出し 入場者の呼び出しは、やむをえざる緊急の場合以外はいたしません。

休憩所 ①三階のレセプションホールと②和室と二個所あります。ともに禁煙といたしますので、喫煙は、館内に多く広く設けられています喫煙所(椅子つき)でお願いいたします。和室では、某氏所蔵の「懐徳堂一門書状」や「中井竹山・履軒・蕉園の書軸」を展示の予定です。大阪大学所蔵「懐徳堂文庫」の書軸等の学外展示は、今回、諸般の事情でできませんでしたため。なお、和室では、御希望者に、大阪大学茶道部が奉仕をいたします。

昼食会場 休憩所のレセプションホール(役員会出席者は会議室)に限らせていただきます。なお、会議室での飲酒は禁止されていますが、レセプションホールでは自由です。

弁当 会場附近は食堂が少なく、館内食堂もこみあうことを御承知おき下さい。弁当受取は十二時半まで。

懇親会 阪急電鉄で吹田駅から梅田駅まで約二十分。懇親会場は、ルシェル(フランス料理店。27ページに地図)。

書店 会場との契約上、場内で物品の販売はできません。しかし、書籍を御覧になりたい会員への便宜のため、準備会として新刊書籍などの展示(関西の三書店に委託)をいたします。

学会報 大会が例年より一個月早くなっていますため、当日までに刊行できるかどうか未定です。

プログラム

哲学・思想部会（会場は一階集会室）　文学・語学部会（会場は二階中ホール）

九月二十五日（土）午前の部（午前十時十五分　開始）

① 『左伝』に見る規範逸脱と予言
玉木尚之（高知大学）
司会　安本　博（愛知大学）

② 秦の吏道とその展開
――雲夢秦簡を手掛かりとして
湯浅邦弘（島根大学）
司会　澤田多喜男（千葉大学）

③ 『淮南子』の自然観
――「一類」ということを手掛かりに
村田　浩（京都大学大学院）
司会　浅野裕一（東北大学）

④ 王莽及び更始の時の「諮」について
串田久治（愛媛大学）
司会　田中麻紗巳（日本大学）

⑪ 陸機の「文賦」と陸雲の「與平原書」
佐藤利行（安田女子大学）
司会　興膳　宏（京都大学）

⑫ 王羲之『蘭亭序』不入選問題の検討
清水凱夫（立命館大学）
司会　岡村　繁（久留米大学）

⑬ 「芳草」考――晩唐五代文学の一面
森　博行（大谷女子大学）
司会　村上哲見（東北大学）

⑭ 仕と隠――蘇軾の密州知事時代
湯浅陽子（京都大学大学院）
司会　山本和義（南山大学）

午後の部（午後一時三十分　開始）

⑤　強死せしものと死体の方へ
　　――范縝『神滅論』の方向転換
　　中島隆博（東京大学）
　　司会　中嶋隆蔵（東北大学）

⑥　「太極図」の形成と浸透
　　――儒仏道三教をめぐる再検討
　　吾妻重二（関西大学）
　　司会　福田　殖（九州大学）

⑮　古代中国表意文字に於ける意味と記号の変遷についての一考察――〈手の記号〉と〈足の記号〉の比較を通じて
　　菅井紫野（京都大学大学院）
　　司会　阿辻哲次（京都大学）

⑯　中国讃仏詩の起源
　　平田昌司（京都大学）
　　司会　荒牧典俊（京都大学人文研）

シンポジウム「儒教と二十一世紀と」（発言は五十音順）

基調提題者　島田虔次（ゲスト・京都大学名誉教授）
　　陳　舜臣（ゲスト・作家）
代表討論者　井波律子（金沢大学）
　　佐藤慎一（ゲスト・東京大学教授）
司会者　河田悌一（関西大学）

＊　シンポジウムの目的・パネラーの紹介・レジュメ等は、小冊子にまとめて大会当日に配布の予定。

＊　「基調提題」、「代表討論」、「フロアの会員との討論」は各一時間を充てる。

九月二十六日（日）午前の部（午前九時四十分　開始）

⑦ 東林学派の思想的背景についての再検討
鶴成久章（広島大学大学院）
司会　佐野公治（愛知県立大学）

⑧「群」と「民徳」
――厳復における西洋体験と「群学」の形成
手代木有児（福島大学）
司会　堀池信夫（筑波大学）

⑨ 梁啓超と陽明学
竹内弘行（名古屋学院大学）
司会　橋本高勝（京都産業大学）

講演「目連戯の地方的分化とその背景」
講　師　田仲一成（金沢大学）
司　会　岩城秀夫（仏教大学）

⑰ 元の閨秀詩人鄭允端の文学
――特に女訓的な詩を中心にして
小林徹行（無窮會東洋文化研究所）
司会　小栗英一（静岡大学）

⑱『金瓶梅』と『宝剣記』
日下　翠（九州大学）
司会　清水　茂

⑲ 陳奐の詩経研究の方法と性格
種村和史（慶應義塾大学非常勤講師）
司会　近藤光男

＊講演中、一部ビデオを使用の予定。

午後の部（午後二時十分　開始　四時十分ごろ終了の予定）

学術参考ビデオ（大阪大学文学部中国哲学研究室提供）

（1）『儀礼』士昏礼の復元（約一時間）　中華民国の中華文化復興運動の一環として、16ミリ映画で作製された（周何・台湾師範大学教授ら監修）。そのビデオ版であるが、映写状態がよくないこと、最初の数分間は音声が乱れていることを諒解されたい。

（2）台湾省における現代の葬礼の記録（約四十分）。　＊（1）の日本語訳、（2）の大要の日本語説明は、シンポジウム関係資料とともに小冊子にまとめ、大会当日に配布の予定。途中休憩十分間の予定。

適塾・懐徳堂案内　適塾は幕末における洋学（蘭学）研究の有力指導者であった緒方洪庵の旧宅であり、同時に学塾であった。福沢諭吉ら近代日本を作った人々が多くここで学んだ。その学統は、数度の変遷を経て、大阪大学に発展している。また、28ページの「適塾への地図」中、懐徳堂記念碑の場所を記してある。中井竹山・履軒・山片蟠桃らを生んだ江戸時代の漢学塾「懐徳堂」も、幾多の変遷を経、建物はないが、現在その蔵書を「懐徳堂文庫」として大阪大学が管理している。適塾・懐徳堂ともに精神的源流として大阪大学がその記念事業を行なっている。

適塾参観招待券を同封してありますので、自由に御参観下さい。

①『左伝』に見る規範逸脱と予言

玉木尚之

人物の容貌・装い・態度・言葉遣い、夢、卜筮、星の運行。よく知られているように、『左伝』の記述は、そうしたさまざまな現象に人や国の将来を表示する予言的言説に充ちあふれている。

そうした予言的言説を成立させる論理について考えてみたいのであるが、非常に多岐にわたるそうした記述を網羅的にすっきりとまとめあげる力はとてもないので、先行の議論によりつつ、以下のような観点からこの問題にアプローチしてみたい。

それら予言的言説の大半を占める人物の態度等によるものは、古来からの、または当の社会の支配階層に共有されている規範に従っているか、そこから逸脱しているかという観点からなされていると言ってよいだろう。規範から逸脱するときその人物（そして往々にその人物の政務を執る国）は不幸な将来を迎え、規範に合致する人物の将来は開けることになる。

一方で、往々に結果と荒唐無稽に結びつく卜筮や夢による予言があり、我々はそれらを上記の諸記述以上に、結果を踏まえて成長した物語とみなすわけだが、そうした卜筮や夢の予言が集中する傾向のある場、それはどうやら簒奪や、それに類する権力の抗争に関わる場であるらしい。彼らの行為は、規範に従うだけでは最終的に正当化され得ない行為ということになるのであろう。

以上のある意味で両極をなす予言的言説を中心に据えて、予言的言説の持つ論理について多少なりとも迫ってみたい。

② 秦の吏道とその展開
――雲夢秦簡を手掛かりとして

湯浅邦弘

一九七五年、中国湖北省雲夢県睡虎地に於いて発見された雲夢秦簡(睡虎地秦墓竹簡)は、秦の法治の実態や当時の思想的状況を伝える貴重な新資料である。この雲夢秦簡については既に、法制、職官、裁判、経済、軍事、宗教、文字など多方面からの研究が試みられており、私も先に、秦律から帰納し得る秦の統治理念や、その理念と末端統治の現実との関係などについて基礎的な考察を行なった(『日本中国学会報』第三十六集、『中国研究集刊』天号)。

しかしながら、残された問題もなお多い。例えば、南郡守騰が発布した「語書」、吏たる者のあるべき姿をほぼ四字句ずつに綴った「為吏之道」についての研究は、秦律自体の詳細な分析に比べて、やや手薄な感を否めない。特に、その思想史的意義については、「語書」は法家思想、「為吏之道」は法・儒・道の融合という極めて漠然とした捉え方に止まっている。

そこで、今回の発表では、出土資料を使用した戦国秦漢思想史研究の一環として、この雲夢秦簡「語書」「為吏之道」に見える官吏像に的を絞り考察を加えてみることとする。

具体的には、「語書」に見える「良吏」「悪吏」、「為吏之道」に見える理想的官吏とはいかなるものか、また、それは商鞅・韓非子などの法家思想といかなる関係にあるのか、また、そもそも秦は地方の統治に際して吏の問題を何故にかくも重視したのか、更には、こうした官吏像が『史記』を初め歴代の正史に立伝される「循吏伝」「酷吏伝」等とどのように関連して行くのか、などについて検討してみたい。

③『淮南子』の自然観
――「類」ということを手掛かりに

村田　浩

災異思想は、漢代を通じて重要な位置を占める思想である。人間世界の外にある自然界のできごと（多くは人間にとって不都合な）を、人間世界の内で起きるできごとと関連させようする思考である。とすれば、その関連のさせ方が、まず問題となる。また同時に、自然なるものをどのように捉えていたのかということも、問題となろう。

災異思想を体系的に説き始めたのは、武帝期の董仲舒だと言われる。だが、董氏の著作はほとんど残っておらず、唯一まとまった形で残されている『春秋繁露』については、本人の手には係らない部分があるのではないかと言われている。董仲舒の自然観をはっきり示してくれる資料は、信用できるものとしては『漢書』所載の記事が主なものである、ということになっている。

そこで、同じく武帝期の作である『淮南子』によって、当時の自然観の一端を窺おうとするのが、本発表の目的である。過去、『淮南子』の自然観については、『淮南子』の道家思想を中心に考察する立場から、主に「気」をキーワードとして論じられてきた。本発表では新たに、『春秋繁露』でも言及される「類」ということを手掛かりに、『淮南子』の自然観を考えてみたい。そこから、災異思想における感応ということについても、何らかの発見が得られるかもしれないからである。

④　王莽及び更始の時の「謡」について

串田久治

特定の人物を非難中傷することの多い「謡」（童謡を含む）は、王朝交替期や暴虐な政治が行われた時に、また政治的・社会的混乱期に生まれては流行する。そして、歴史書はそれぞれの「謡」が何らかの未来を予言していたかのように記録する。

ところで、『晉書』天文志に、「凡そ五星盈縮、位を失えば、其の精　地に降りて人と爲る。歲星は降りて貴臣と爲り、熒惑は降りて童兒と爲り、歌謡し遊戲す。……吉凶の應、其の象に隨いて告ぐ」とあるように、「童謡」は熒惑星が化した赤衣の子供の謳ったものとされ、天の意志を伝達する神託の様相を呈するが、「童謡」をこのように定義したのは『晉書』に始まる。確かに『漢書』五行志は「謡」を暴虐な君主に対する「怨謗の氣」が引き起こした「詩妖」として解釈するが、天の託宣とはしない。漢代までの「謡」は必ずしも讖言として存在したのではなく、あくまで現実社会・政治に対する不安や絶望、怨嗟や憤怒をぶつけたものであり、それらを流行させて体制への反逆・権力機構への脅しとしたものである。したがって、同じ「予言」であっても漢代までのそれは性格を異にする。すなわち、この場合の「予言」とは、「上の號令、民心に順ならず、虚譌慣亂すれば、海内を治めること能わず」、「刑罰妄りに加わる」、「旱、百穀を傷なう」（『漢書』五行志中之上）など、失政や頻発する自然災害から生まれた怨恨・憂慮に端を発する具体的願望であり将来への展望なのである。

この点を踏まえながら、前漢末から新を経て後漢に至る時期に謳われた「謡」のいくつかを分析しながら、王莽と更始の二人の社会的・政治的問題点を探ってみたい。

⑤　強死せしものと死体の方へ
――范縝『神滅論』の方向転換

中島隆博

范縝『神滅論』とそれへの批判である神不滅論を読解するアクセントをずらすこと。神滅不滅の論争は、霊魂が不滅であるかどうか、無神論か有神論かというポレミックな神学的議論ではない。それは、結果的には一つの強力な神学であるのだろうが、まずは「形」と「神」の新しい把握である「形神相即」がどこまで妥当するのか、「形」と「神」の離合をどう考えるのか、そしてそもそも「形」や「神」は如何なる概念なのかをめぐる哲学的な議論である。ところで「形神相即」論の新しさは、「形」と「神」の関係を「本・末」と捉えたからではない。それは、一つである「体」についての二つの*語り方*の差異として捉えた点にある。「質」「用」という意味に割り振られる意味の上での差異であって、実体的な差異ではない。だからこそ、形神は全く相互的であって不可分なものとして語られる。この論はかなり強力で、夢を持ち出したり、「形」「神」の関係を「即」ではなく「合」だとする蕭琛や曹思文の、「形神相即」を認めない外在的な批判では論破できない。「形神相即」論は実在と意味と強力な一致を前提にしているからである。しかし、そのロジックの内部にはいくつかのアポリアがある。複数の「神」と一つの「神」の関係をどうするのか、対応する「神」を持たない「形」や、「形」を持たない「神」があるがそれはどういうことか、とりわけ「慮」という「神」に対して持ち出してきた「心器」は疑わしくはないか、また他人の「慮」がわかるというコミュニケーションはどうなるのか？　これらの問いが、「形神相即」論の限界を刻んでいる。しかし范縝はなおも「形神相即」だと強弁するかもしれない。ところが、これは、それが主題的に論じているはずの死を〝構造的に〟論ずることができないのだ。それは不自然な強制死を論ずることができないだけではない。何よりも、死体がここからはみ出している。死を無きものにはできないのだ。

⑥「大極図」の形成と浸透
――儒仏道三教をめぐる再検討

吾妻重二

北宋・周敦頤の「大極図」の来源については古来さまざまな議論がある。人も知るように、五代宋初の道士・陳摶から伝えられたという伝承があること、また周敦頤が寿涯なる僧に師事したという証言があること等から、道教および仏教の先行資料の中に図象的先例がさまざまに求められてきたのである。

今回の発表では、先学の諸研究をふまえて、右の伝承が成り立ちえないこと、また『道蔵』所収の「上方大洞真元妙経図」を来源とする説が誤りであることを再確認した上で、次のことを検証することとする。

（一）「大極図」が当時の道教内丹のプロセスを逆転させたものであるという清・黄宗炎説は、憶測にすぎない。黄のいう内丹理論は、元初頃のそれを雑引したものである。

（二）唐・宗密のいわゆる「阿梨耶識図」（『禅源諸詮集都序』）を来源とする説もまた誤りである。むしろ「大極図」にもとづいて「阿梨耶識図」が描かれている。

さらに『道蔵』その他の諸文献により、以下の諸点を必要な範囲で考察してみたい。

（三）道教からの影響は、図の第二位において認められるようだが、しかし全体としてその思想的影響は一部にとどまる。

（四）「大極図」が道教から受けた影響よりも、「大極図」が道教側に与えた影響の方がはるかに大きい。このことは、仏教についても言いうる。「大極図」が後世、道教・仏教に受容、浸透していったことの方が、思想史的に重要であると思われる。

⑦ 東林学派の思想的背景についての再検討

鶴成久章

東林学派の研究に関しては、従来数多くの論考が提出されている。ただ、その多くはいわゆる東洋史関係の学者の手による政治闘争・階級闘争がらみのものか、あるいは中国哲学の研究者による顧憲成・高攀龍の理学思想にほぼ限定した内容のものであった。このような状況に鑑みて、溝口雄三氏は「いわゆる東林派人士の思想」を発表され、より広範な視野から東林学派の思想運動を明らかにされた。氏の見方によれば、東林学派の活動は、国家ヘゲモニーに対抗する郷村ヘゲモニーの主張であったとされる。このような氏の見解はいわゆる郷紳論争の延長線上にあってなされた議論であるが、東林学派の研究において新たな視点を提示した点で非常に価値のある研究である。しかしながら、氏の規定によれば、東林学派の活動は、明末の社会・政治の混乱状況の中で、郷村主導の形で改革を加えていこうとした、氏のいわゆる「プラス座標軸」上の動きを総称するものであった。もちろん、このような定義づけは、東林学派を中心とする明末の改革運動を全体的にとらえるのに実に有効である。だが、氏が定義されたいわゆる東林学派内部においても、個々の思想的・政治的立場がかなりの多様性を持っていたことは言うまでもない。とりわけ、地域的な利害関係、思想学派の相違等は、重要な問題をはらんでいるといえる。マクロな視野からみれば、思想的に同じ方向性を持ったといえる東林学派も、それぞれに異なる背景を抱えた人々の集まりとしてとらえ直すことにより、新たな思想的特徴が明らかになるのではなかろうか。本発表では、以上のような問題関心から、いくつかの実例をとりあげ、東林学派内部における思想的な差異について考察を加えたい。

⑧「群」と「民徳」
――厳復における西洋体験と「群学」の形成

手代木有児

厳復がスペンサー社会学すなわち「群学」をいかなる形で彼の思想に中に吸収したかは、「原強修訂稿」〔一八九六?〕にほぼ端的に示されている。そこで厳復が救亡・富強の理論たる「群学」の主要な要素として示した社会進化論的な有機体的国家観、および民力、民智、民徳の増進という救国策は、実は必ずしもスペンサー社会学の忠実な紹介ではなく、B・I・シュウォルツがいうように、中国の救亡・富強を目指す厳復によって少なからず歪曲されたものであった。その意味で「群学」はスペンサーの「群学」というより、スペンサー社会学が厳復独自の文脈の中で変質を遂げた厳復の「群学」であった。ところでシュウォルツは、この変質を主にスペンサーと厳復の思想に内在的な要因に力点をおいて論じたが、シュウォルツ自身認めるように「群学」は厳復の体験的西洋認識に支えられていた。しかもその認識の原形の形成は、留学期の記録や厳復の後の言論から見て、スペンサーの理論との出会いに先行するものと考えられる。とすればその変質の実態は、厳復の体験的西洋認識の在り方にまで遡って考察してこそ、解明し得るものであろう。

こうした問題意識から、本発表では、英国留学期の厳復に関わる資料も踏まえ彼の西洋体験の実態に迫りながら、中国の伝統的知識人たる厳復がいかなる体験的西洋認識を形成し、その基礎の上にいかにして救亡・富強の理論を構築していったのか、またその過程でスペンサーの理論がいかに作用し、またはしなかったのかについて、「群学」に示された新たな世界観・国家観の土台たる「群」有機体イメージ、および救国策の核心と目される「民徳」概念に着目しつつ、明らかにしてみたい。

⑨　梁啓超と陽明学

竹内　弘行

梁啓超（一八七四－一九二九）は、清末から民国初期にかけて活躍した学者・ジャーナリスト・政治家である。

彼は、その生涯において何度か自説を変えたことで有名だが、私が特に注目したいのは彼は一生のうち二度にわたり中国伝統思想の陽明学を頌揚してその普及に努めた時期があったことである。

最初は、日本亡命中の一九〇〇年代中頃で、孫文ら革命派と対立し、改良主義の旗幟を鮮明にするかたわら『徳育鑑』・『節本明儒学案』等を出版して陽明学を中心とした伝統倫理の修養を訴えた。革命派の宋教仁らが陽明学にとり組んだのも、この時期である。

二度目は、一九二〇年代の中頃で、既に政治活動から手をひき、清華学校で教鞭をとるかたわら、再び陽明思想の価値を認めて『儒家哲学』、『王陽明知行合一之教』等を発表した。当時、梁啓超は、既に名著『清代学術概論』や『中国歴史研究法』等を発表していて、中国伝統学術を総括した上での陽明学頌揚であった。

今回の発表では、この二度目の陽明学の思想的価値を発揚した時期について、そのもった思想史的意味を、特に一九二〇年代の中華民国の思想状況（五四文化運動のめざした儒教批判への反発、第一次世界大戦後の「西洋の没落、東洋の復興」の風潮、デューイらのプラグマティズムの流行、およびロシア革命後のマルクシズムの浸透等々）との関連の上で考察してみたい。

⑪　陸機の「文賦」と陸雲の「與平原書」

佐藤利行

陸機の「文賦」は、賦の形式を借りてその文章・文學觀を記したものである。また、陸雲が兄の陸機に與えた「與平原書」三十數首は、主に文章制作について語られたもので、そこから陸雲の抱いていた文章・文學觀、さらには陸機のそれが、鮮明に浮かび上がってくる。そうして、「文賦」の中で展開される文學論が觀念的であるのに對して、「與平原書」の中では、實際に作品名や、或いは作品の語句を示しながらの、具体的な文学論が示されている。

この両者を比較してみるに、文章の用語や句に對する考え方、文章の長さに關することなど、文章表現についての意見、更には文章の「情」や「清」といった内容面に關わる主張に共通點が多く、陸機の「文賦」には、陸雲の書翰におけるやり取りの内容が相当に反映されているということが分かる。つまり「文賦」は、入洛後の陸機が、陸雲との間で文章・文學論を語り合うことを通して、それまで書き続けていたものに加筆し、修正を加えて出来上がったのであり、いわば陸機文学の集大成と呼ぶことのできる作品なのである。

此の度の発表では、かかる陸機の「文賦」と陸雲の「與平原書」との関係について、また「文賦」の著作年代の問題にも触れながら、私見を述べてみたい。

⑫ 王羲之『蘭亭序』不入選問題の檢討

清水凱夫

宋代以来、王羲之の『蘭亭序』が『文選』に選録されていないことが問題として取り上げられ、種々、その理由が詮索されてきた。たとえば、宋・范正敏は、春景にもかかわらず、「天朗氣清」という不適な表現がある上に、「絲竹管絃」という重複表現があることを理由とし、清・喬松年は、「一死生爲虚誕、齊彭殤爲妄作。」という表現が老荘を貴ぶ時代思潮に合わなかったことを理由としている。現代においても、王瑤氏の如きは、喬松年と同じ個所を挙げて、篤く仏教を信奉する昭明太子の思想と相いれなかったことが原因であろうとし、陳中凡氏は『蘭亭序』が修辞に意を用いぬ「散文」である故に、駢儷を偏重する時代風気に合わなかったためとしている。近年刊行された王運熙・楊明氏の『魏晉南北朝文學批評史』においても、この陳中凡説と同様の見解が示されている。

これらの詮索はみなそれぞれに多少の不備な点があり、いずれもいまだ納得のいく結論には至っていない。それはこれらの詮索が『文選』の選録基準を曖昧にしたまま、『文選』は名文なら必ず収録しているとする立場や、王羲之の『蘭亭序』は詞華集には必ず選録されるべき名文であると決めつけたりする観点に立っている傾向が強いことに起因している。つまり、『文選』を模範的詩文集と盲信するか、王羲之『蘭亭序』は不朽の名文と思い込むか、そのどちらかに偏向しているのである。これらはいずれも『文選』、王羲之『蘭亭序』をそれぞれ絶対視しているふしがあり、文学研究上、大きな問題である。

そこで、これらの観点を脱却して、時代背景を考慮に入れて新たにこの問題を検討してみたい。

⑬ 「芳草」考 ── 晩唐五代文学の一面

森　博行

唐詩を通読していて、晩唐から五代にかけて、「芳草」という言葉が、かなり頻繁に現われることに気づいた。今回、唐詩に現われた「芳草」を正式に調査したところ、はたして予想以上に、晩唐から五代にかけて「芳草」という言葉が頻出することが、数量的に確認された。晩唐を代表する詩人・杜牧の『池州春送前進士劉希逸』と題する詩の冒頭に、「芳草復芳草、断腸復断腸」、また晩唐五代の韋荘の『旧居』と題する詩の冒頭に、「芳草又芳草、故人楊子家」とある。「芳草」という言葉が、冒頭の一句の中に二度も用いられるのは、私が調査したかぎりで言えば、右の詩だけである。

ある言葉を好んで使用するということは、本来、個人的な嗜好に属することである。しかし、「芳草」に関しては、むしろ時代的な風潮と解釈したほうがいいように思われる。つまり、晩唐から五代における「芳草」の使用は、個人的なものを越えた一種の流行現象のように思われるのである。

文学作品（韻文）における「芳草」は、『楚辞』以来の古い歴史を持つものであるが、この時代にどうして「芳草」という言葉が流行したのであろうか。それは、晩唐から五代という不安定な時代に生きていた人々が、何か確実なものを求める心理の反映である、と考える。しかしなぜ、ほかならぬ「芳草」であったのか。それは、かおりが持っているある特殊な性質による、と考える。

以上の諸点を明らかにするために、先ず最初に清代までの詩における「芳草」の数量的実態を報告し、次に晩唐から五代における「芳草」流行の意味について、最後になぜ「芳草」かという点について、具体的に作品を分析することによって、いささか卑見を述べてみたい。

⑭ 仕と隠 ── 蘇軾の密州知事時代

湯浅陽子

「仕」と「隠」、つまり世間にあって官吏であることと、世間を避けることとの関係は、伝統的な中国の文学の主要なテーマの一つとなってきたものである。ここでは、その時代を代表する官僚が、同時に代表的な文人でもあった宋代の士大夫の文学に現れる、その「仕」と「隠」との関係について、典型的な文人官僚の一人である蘇軾の場合を取り上げて考察したい。

北宋神宗の熙寧八年（一〇七五）十一月に、蘇軾は初めて知事として密州へ赴任しているが、当時の蘇軾の詩文には「仕」と「隠」のあり方に関する表現を多く見ることができる。これは当時の蘇軾の「仕」と「隠」の関係に向けられた関心の深さを示すものであろう。このような「仕」と「隠」との関係に関心を寄せた人物として、通常想起されるのは、中唐の白居易であろうが、この白居易の「吏隠」は「仕」と「隠」とを現実の生活の中で調和させようとするものであった。それに比して当時の蘇軾は、このような白居易の「吏隠」に強い関心を示しているものの、白居易のように両者を穏やかに調和させることはできない状態にある。つまり蘇軾においては、「仕」と「隠」とは依然、強く対立するものとして捉えられ、彼はその間で常に葛藤を感じているのである。

⑮ 古代中国表意文字に於ける意味と記号の変遷についての一考察――〈手の記号〉と〈足の記号〉の比較を通じて

菅井　紫野

漢字は現在広域で使用されている文字の内、ほとんど唯一の表語文字である。その文字体系は、六書の所謂象形・指事という図象的記号を母体とし、僅か百五十余の単体字と、それを意符または声符として組み合わせた複合字で成立しているとされる。

表音文字が純粋に音だけを記号にするのに対し、直接概念を記号に対応させる表語文字は、常に表現内容の多様化への要求にさらされている。表語文字が、記号体系を繁雑にせず、最小限の記号でこの要求に応えるには、ある概念にどの記号を採用するか、また逆に一つの記号をどのような概念を辿って運用していくかが重要なポイントとなるように思われる。

これまで、中国古代表意文字（甲骨文字・金文から小篆）に於ける身体部位を象形する記号群に注目してきた。小篆の時期の〈手の記号〉については、既に『説文解字注』を資料として、形・数を調査し、運用の経路＝意味機能の分化の過程を整理している。

今回は、甲骨文字・金文からの形の変化を踏まえつつ、〈足の記号〉の形・数・用法を追う。最終的には、〈手の記号〉と〈足の記号〉の意味機能の分化の過程を比較検討する。

『説文解字注』の九三五三字の親字の内、〈手の記号〉を含む文字は約二〇・四パーセント、〈足の記号〉を含む文字は約一六・四パーセントであり、どちらも大きな体系を有する記号群である。

⑯ 中国讃仏詩の起源

平田昌司

陳寅恪「四声三問」は、早くにインド韻律学の四声論への影響を仮説として提示した。これに対する饒宗頤・兪敏らの批判の論拠のひとつに、律の規定ではヴェーダに似た朗誦法を用いて仏教経典をうたうことが禁じられているという事実がある。しかし紀元後一世紀前後から、西北インドを中心とする仏教教団では異教的要素が許容されはじめていた。仏教文学では馬鳴の戯曲・讃仏詩がこの傾向を代表する。それとともに西北インドの強い影響下にある亀茲・焉耆などでも各種の韻律を用いた仏教詩が作られるに至っていた。E.Waldschmidt、L.Sander の手になる出土文献目録（*Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*）に見える多数のサンスクリット讃仏詩、あるいは亀茲仏教遺跡出土の韻律学綱要書 *Chandovicitti* は、後漢から斉梁に相当する時期のトルファンにおいて、音楽をともなった仏教詩がきわめて普遍的なものだったことを示している。

『高僧伝』鳩摩羅什伝にいう「西方辞体」とは、出土作品にみられるような各種の韻律をさしていた可能性が高い。おそくとも鳩摩羅什の時代までには、こうした韻律および音楽をともなう讃仏詩とその作詩知識は中国へと伝来していたはずである。『高僧伝』経師篇などのいわゆる「梵唄」こそは、その流れを直接に受けたものであり、歌詞のなかにはインド系の言語からの訳詞もあったのではないかと想像される（たとえば西涼州唄の「面如満月」という表現は、トルファン出土讃仏詩にもしばしば見られる常套句である）。これら出土資料によるならば、陳寅恪の仮説は、讃仏詩の韻律知識の中国への輸入、永明四声説への発展について正確な見通しをもっていたと評価できるであろう。

讃仏詩のこうした流れの追跡をとおして、中国語学史上の「四声論」形成、インド系文学・芸能の中国への浸透の過程についての、より確実な把握が可能になるかも知れない。

⑰ 元の閨秀詩人鄭允端の文学
――特に女訓的な詩を中心にして

小林徹行

中国の詩の流れの中で、女性が本質的に文壇へ参加するようになるには、元代より明代にかけて、詩作の中心的な担当者が官僚から一般市民層に移った時代を待たねばならない。

ここに取り上げた鄭允端（字は正淑、一三二七～五六）は、元末に平江（現在の江蘇省蘇州）に居を構えていた施伯仁の妻で、短命であったにも拘らず、意欲的に古詩や近体詩に取組み、独自の見解と作風とを世に問うた女流詩人の一人と言える。

そこで、本発表ではすでに拙稿「元代女性詩人鄭允端雑考－現存『粛雝集』について－」（『東洋文化』復刊第七十号）に於て論及した現存のテキストに基づいて残存詩の特徴を考察し、その底流にあるものについて論じてみたい。

⑱ 『金瓶梅』と『宝剣記』

日下翠

『金瓶梅』が、作品中に他作品よりの引用を多数含んでいることは周知の事実である。とりわけ有名なものとしては『西廂記』、元雑劇の『玉簫女』、『風雲会』、さらには『詞林摘艶』からの詞曲の引用などがあげられるが、中でも群を抜いて多いのが、嘉靖の文人李開先作の戯曲『宝剣記』からの引用であり、明らかに他作品とは状況を異にしている。

この事実はすでに、先人たちの注意を引いており、呉暁鈴、徐朔方、卜鍵等、『金瓶梅』作者李開先説をとなえる人々の、有力な証拠の一つとなっている。特に、卜鍵氏は著書『金瓶梅作者李開先考』に於いて、一章を設けてこの二作品をとりあげ、その共通点を論述しており、注目すべき成果をあげておられる。(同書第四章「『宝剣記』与『金瓶梅』」参照。)

今回の発表では、さらに詳しくこの二作品を比較し、検討を加えてみることにより、李開先作者説への補強の一助とし、さらに『金瓶梅』作品理解への一つのアプローチとして、対の関係より考えてみたいと思う。

『金瓶梅』は『水滸伝』より題材を得ている。それも、一番の悪女と無頼漢——潘金蓮と西門慶のカップルを、わざわざ主人公に選んでいる。一方『宝剣記』はというと、同様に『水滸伝』より題材をとってはいるが、反対に、主人公は『水滸伝』一の高潔の士、林沖と、随一の貞女たるその妻張氏とのカップルである。(張氏は『水滸伝』ではすぐに自殺するのであるが、『宝剣記』では、死んだのは別人であったとして物語を続けてゆく。パターンは『金瓶梅』と同一である。)『金瓶梅』という、この奇妙で破滅的な背徳の書は、その対極に『宝剣記』を置くことにより、つりあいと安定がとれると考えられる。そういう意味でも、『宝剣記』は、『金瓶梅』を理解する一つのかぎといえるのではないだろうか。

⑲ 陳奐の詩経研究の方法と性格

種村和史

陳奐の『詩毛氏伝疏』は、清朝考証学の詩経研究における集大成的な位置を占める著述であるが、彼が段玉裁と王念孫・王引之に親しく教えを受けていることから、これを戴震以来の詩経研究の流れの中においてとらえることができる。しかしながら実際には、「詩を読みて序を読まざるは無本の教也。詩と序とを読みて伝を読まざるは失守の学也」（『詩毛氏伝疏』自序）という言葉に表された陳奐の詩経研究の態度は、戴震のそれとは性格を大きく異にする。このように、戴震から陳奐までの詩経研究は単純な継承発展の関係のみで概括できるものではなく、その間に学問的な変容を経たものであることが看取される。このことは清朝の詩経学の歴史を見る上で重要な問題となるばかりでなく、広く清朝考証学の性格を考える上でも興味深い材料を提供していると考えられる。

論者はこれまで、戴震の『杲溪詩経補注』について彼の詩経研究の方法およびその詩経観を分析し、また、彼の詩経研究を段玉裁と王念孫・王引之がいかに継承しているかを考察した（本学会報第四四号、慶應義塾大学『藝文研究』第六二号）。その結果、詩序や毛享の伝をどのように考え扱うかという詩経解釈上の基本的な問題においてすでに戴段二王それぞれの立場の違いがあり、それが各人の研究方法と目的に質的な差異をもたらしていることを知った。上述の戴震と陳奐との詩経研究の差異の萌芽はここに発していると考えられる。今回の発表は以上の考察をより発展させるために、陳奐の詩経研究に視点を据えて、『詩毛氏伝疏』において彼が先学の詩経研究の方法と成果をどのように用いた上で自己の研究を行っているかを考察し、そこに見られる彼の詩経観・経学観を探ってみたい。

講演　目連戯の地方的分化とその背景

田仲一成

目連戯は北宋期に既にその名を知られた古い戯曲であるが、テキストとしては従来、明中期の鄭之珍本が知られているだけであった。しかるに近十年の間に中国側で地方劇としての目連戯テキストの発掘が進み、現在では江蘇、浙江、安徽、江西、湖南、四川、福建など華中、華南の広い地域にわたり、各地のテキストが紹介され、それぞれの上演の復原も試みられている。この新発見の目連戯に関し、この十年の間に北京の中国芸術研究院の指導の下に、各地で五回にわたる専門家会議（多くは文化部系の研究工作者会議）が開かれ、第二回以降は外国人も招待されている。従って目連戯は、現在の中国の文化政策の中で重要な研究課題となっていると言える。この間、会議の参加、或は自身の現地調査等を通して知り得た目連戯地方脚本は次の通りである。

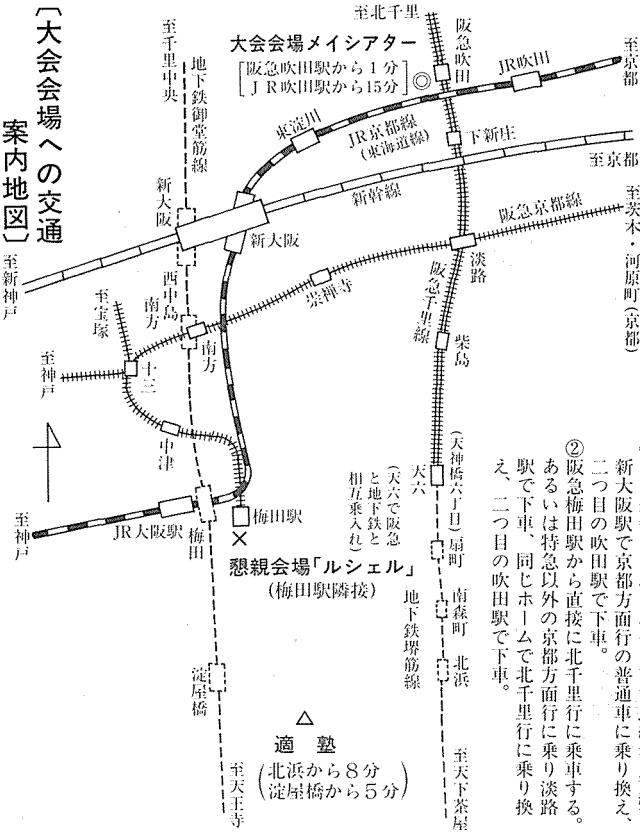
（一）江蘇：高淳県陽腔本
（二）浙江：紹興本、嵊県本、新昌本
（三）安徽：歙県本、祁門本（鄭之珍本）
（四）江西：弋陽腔本、湖口本
（五）湖南：祁陽本（高腔本）、辰河腔本
（六）福建：莆田本、泉州本
（七）四川：四十八本連台本

殆んど各省ごとに多くの異本が並存していることになるが、これについては次の点が検討課題になるであろう。

I　これらの脚本はどのような系統に分けられるか。
II　それぞれの系統は明清戯曲史の流れの中でどのような位置を占めるか。
III　これらのうちどの系統のものが最も古くて北宋期につながり、それがどのような経路で他の地域に伝播したか。

目下のところ、これらの問題を一挙に解決することはできないが、今回は各地の社会背景を視野に入れながら、I・IIの問題を中心に、若干の見通しをのべてみたい。

〔大会会場への交通案内地図〕

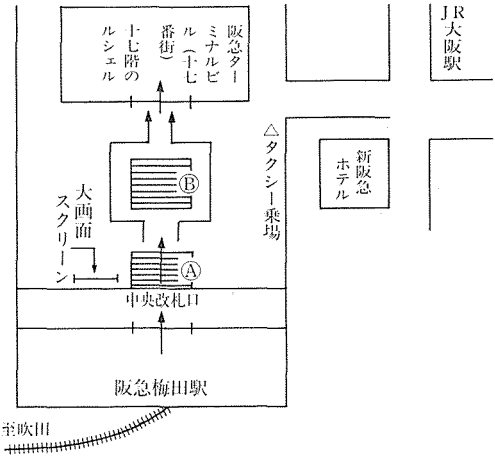


〔大会会場への行きかた〕

①新幹線新大阪駅下車後、東海道線（京都線）新大阪駅で京都方面行の普通車に乗り換え、二つ目の吹田駅で下車。

②阪急梅田駅から直接に北千里行に乗車する。あるいは特急以外の京都方面行に乗り淡路駅で下車、同じホームで北千里行に乗り換え、二つ目の吹田駅で下車。

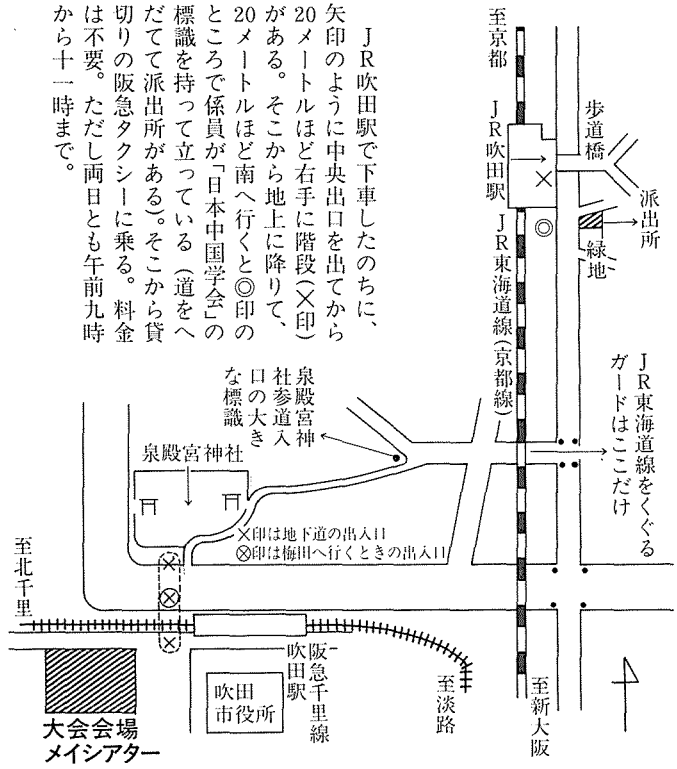
〔懇親会場への地図〕



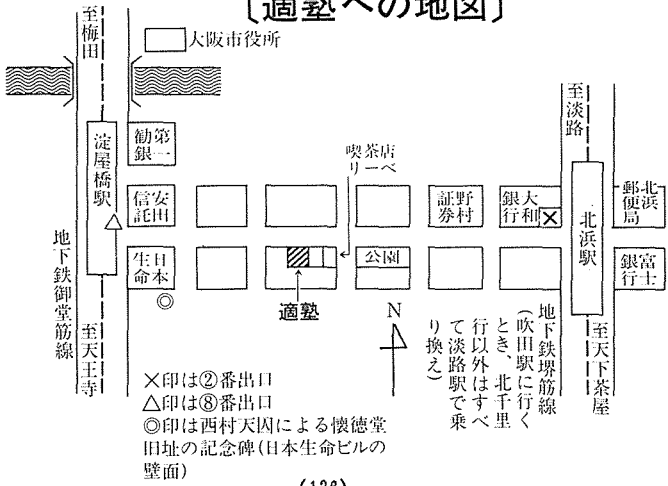
阪急梅田駅下車後、必ず中央改札口を通って、階段Ⓐを降りる。階段Ⓑを避けてその後方のターミナルビルに入る。十七階に懇親会場「ルシェル」（フランス料理レストラン。電話〇六―三七二―五一〇〇）。

〔最寄り駅から大会会場への詳図〕

JR吹田駅で下車したのちに、矢印のように中央出口を出てから20メートルほど右手に階段（×印）がある。そこから地上に降りて、20メートルほど南へ行くと◎印のところで係員が「日本中国学会」の標識を持って立っている（道をへだてて派出所がある）。そこから貸切りの阪急タクシーに乗る。料金は不要。ただし両日とも午前九時から十一時まで。

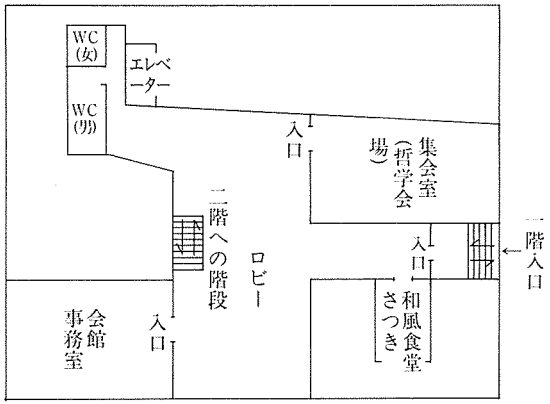


〔適塾への地図〕

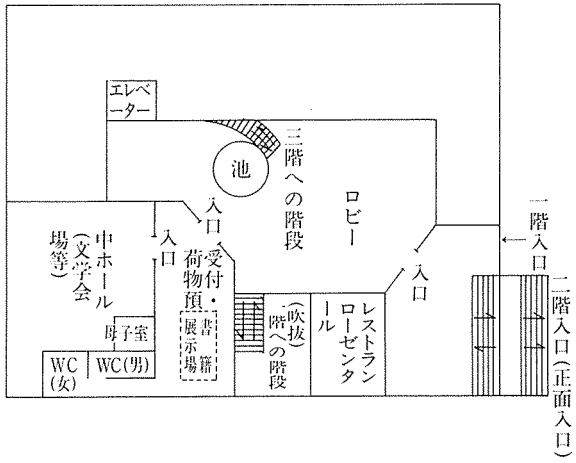


〔会場内の平面図〕

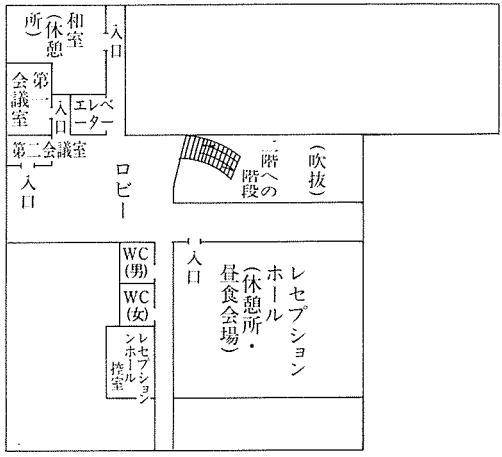
〔一階〕



〔二階〕



〔三階〕



協　賛・大阪大学中国学会
　　儒教文化研究振興会

大会会場

吹田（すいた）市文化会館（通称　メイシアター）
〒564　大阪府吹田市泉町二－二九－一
電　話　〇六－三八〇－二二三一
ＦＡＸ　〇六－三三〇－七二三〇

準備会事務局

大阪大学文学部中国哲学研究室
〒560　大阪府豊中市待兼山町一－一
電　話　〇六－八四四－一一五一
内　線　三一四二（南　昌宏）
ＦＡＸ　〇六－八四五－一一二九
（大阪大学文学部庶務掛）

史跡・重要文化財「適塾」
参観招待券

1597　日本中国学会会員用

９月２４日（金）・２５日（土）午前１０時～午後４時
上記日時のみ有効（２６日の日曜は休館）
日本中国学会第４５回大会準備会・大阪大学中国学会

このハガキは受取人（準備会側）払ですので、出席の方だけ、必要事項記入のうえ、御投函下さい。

〔会員への問合わせ〕（○印で囲んで下さい）

御出席日と主たる会場	25日 ・ 26日	哲学 ・ 文学

	弁当	写真	懇親会
25日(土)	要・不要	要 ・ 不要	出 ・ 欠
26日(日)	要・不要	生年月日 M・T・S 年 月 日	

〔役員への問合せ〕（○印で囲んで下さい）

理事会	評議員会	学術専門委員会
出 ・ 欠	出 ・ 欠	出 ・ 欠

芳名　　北海道・東北・関東・中部
近畿・中四国・九州・海外

（所属）

〔大会当日、ＪＲ吹田駅下車の方へのアンケート〕
下車時間を○印で囲んで下さい。（タクシー配車の資料のため）

25日	9時ごろ・9時半ごろ・10時ごろ・10時半ごろ
26日	9時ごろ・9時半ごろ・10時ごろ・10時半ごろ

〔大阪大学元講師または大阪大学中国学会会員へのアンケート〕
昼食弁当につきまして

25日 要 ・ 不要	26日 要 ・ 不要